

ここだけの話だけど

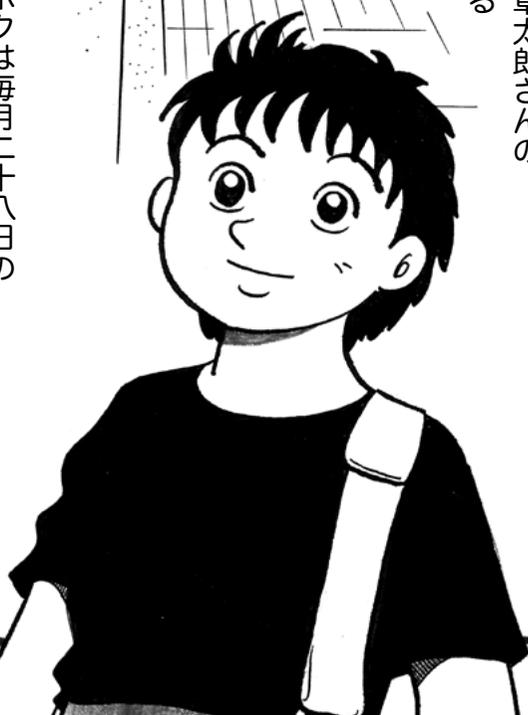


自動筆記の巻

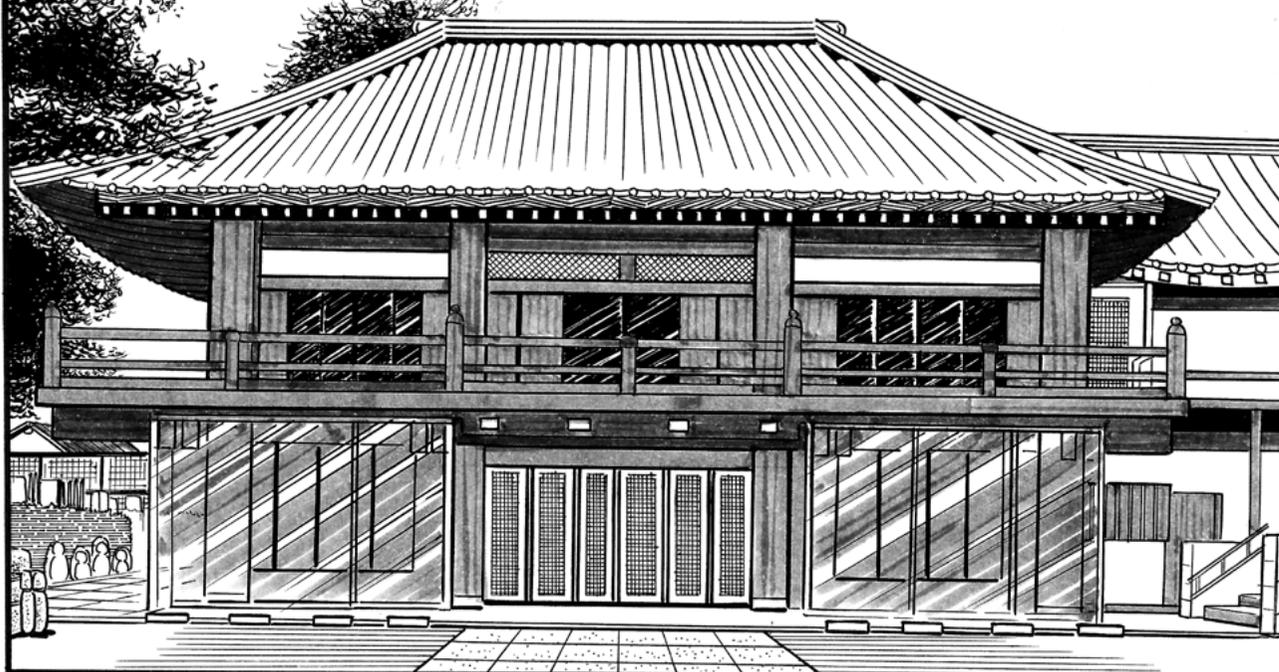
このお寺に好きだった
故石ノ森章太郎さん
のお墓がある

ボクは毎月二十八日の
月命日に池袋の
「祥雲寺」に
墓参りに行っている
自分でも感心する

毎月行くには
訳がある
ボクはマンガ家志望
だからである——

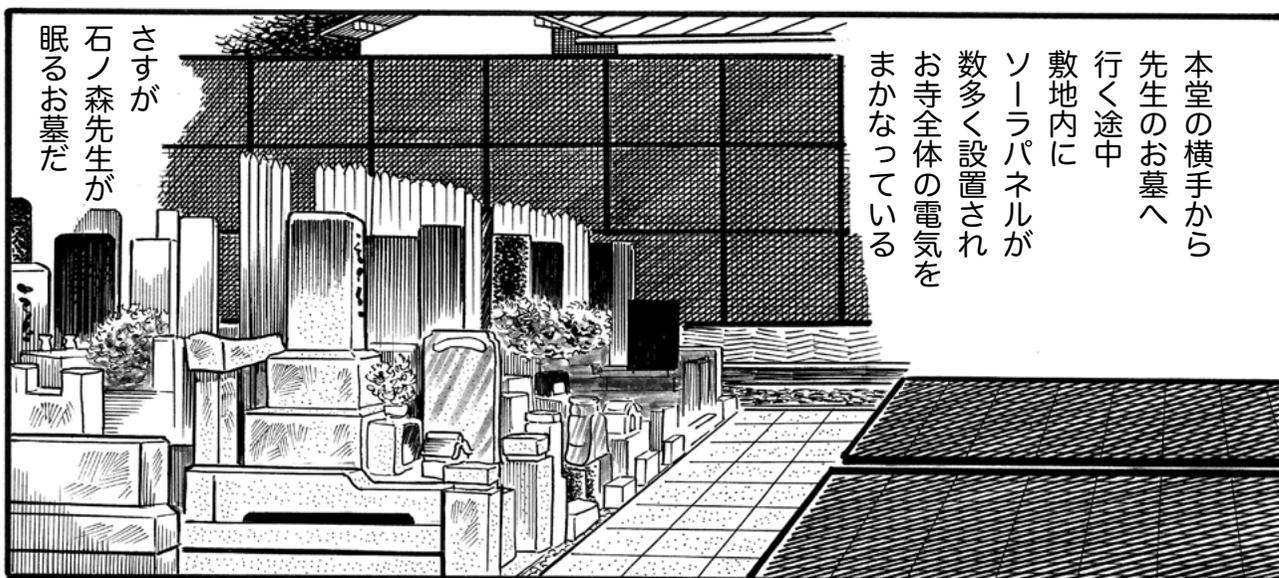


ジャスト・ピンチ



本堂の横手から
先生のお墓へ
行く途中
敷地内に
ソーラパネルが
数多く設置され
お寺全体の電気を
まかなっている

さすが
石ノ森先生が
眠るお墓だ



細い通路を
奥へと進んで
行く



ひときわ
色鮮やかな
お墓が見えてくる
それが先生のお墓である

小野寺利子



ボクはここへ
来るたびに
お願いしている
ことがある

どうか面白い
アイデアが
浮かびます
ようにと

月の命日に
先生のお墓に
来ている人を
今まで一度も
見た事が無いが

その日は
ボク以外
誰か一人
来ていた



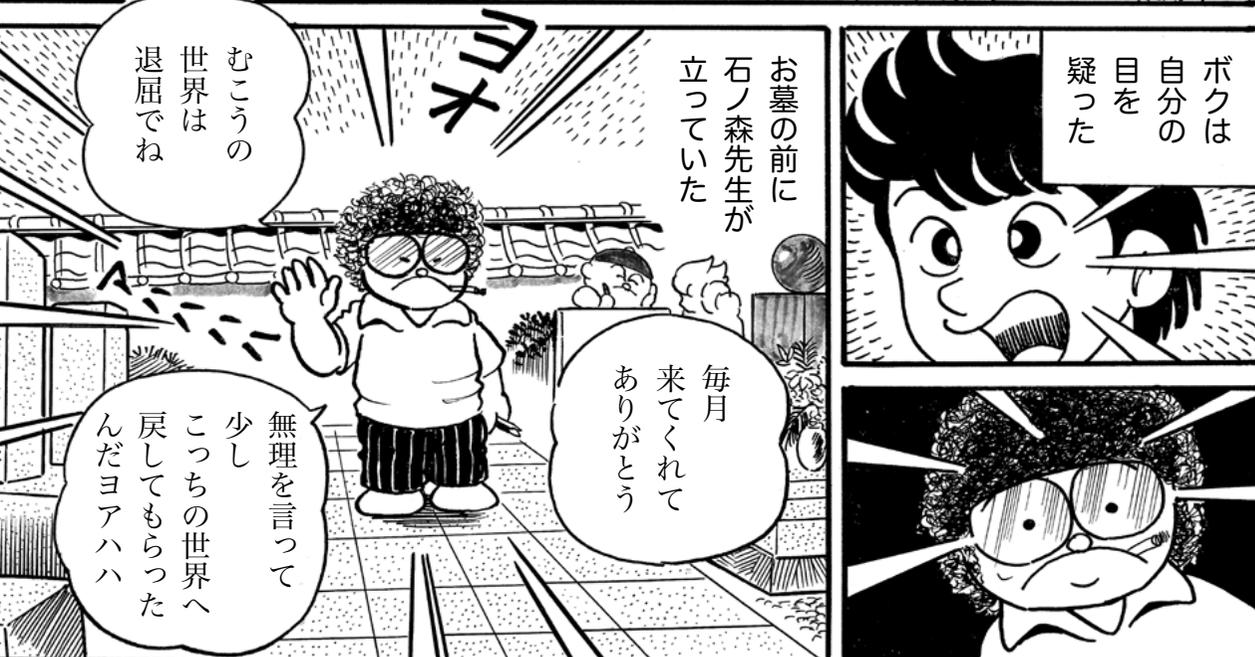
ボクは
自分の
目を
疑った

お墓の前に
石ノ森先生が
立っていた

むこうの
世界は
退屈だね

毎月
来てくれて
ありがとう

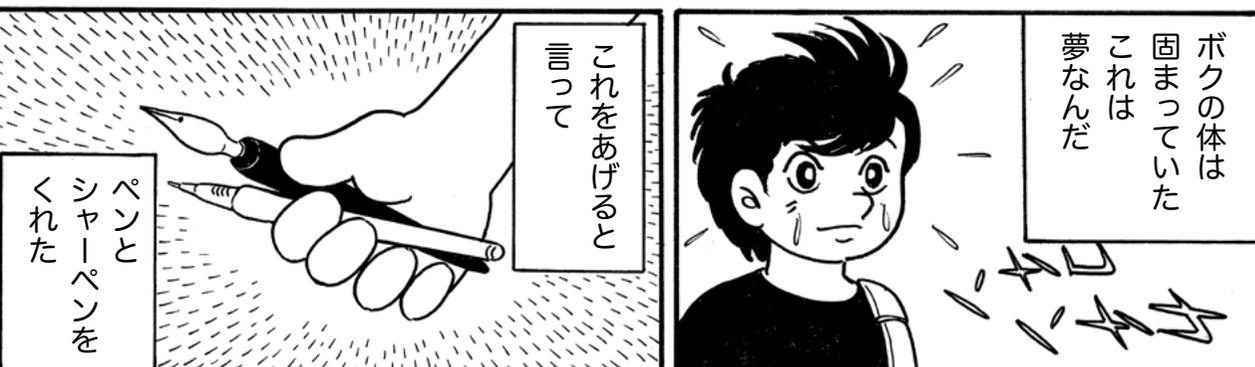
無理を言っ
て少し
こっちの世界へ
戻してもらった
んだヨアハハ



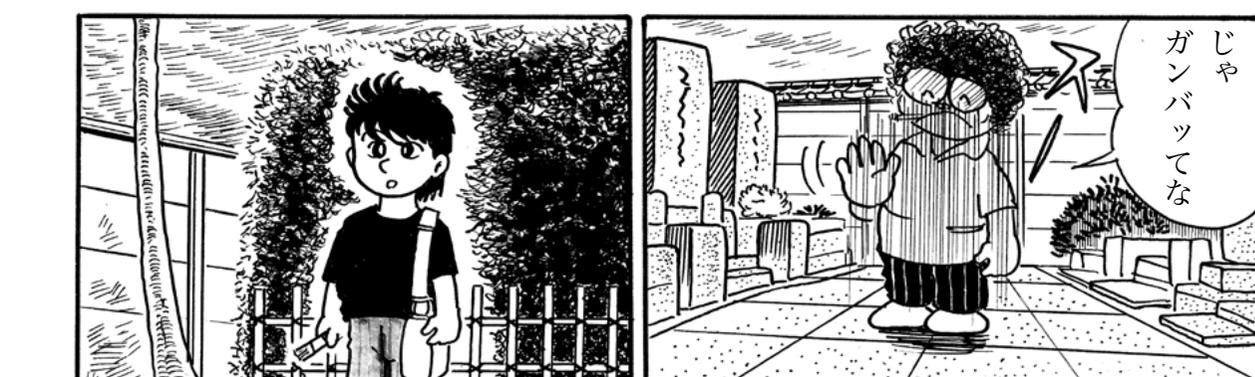
ボクの体は
固まっていた
これは
夢なんだ

これをあげると
言っ

ペンと
シャーペンを
くれた



じゃ
ガンバツてな





先生からもらった
シャーペンで
ネームの続きをした

次から次へと
すごいアイディアが
浮かんできた

これは
もらった
シャーペンの
お陰だと
思った

やっぱり
夢を見て
いるんだ



よし夢だったら
この勢いで
ペン入れするぞ

先生から
もらった
ペンで

まった！



まよ



きみに
お願いがあつて
また出てきたんだ

どーしても
描かずに
いられない
話があつてね

見ての通り
私はこの世の
人間じゃあ
ないし
描きたくても
描けないんだよ





彼は
一心不乱で
描きまくった

漫画は
アツという間に
出来上がった

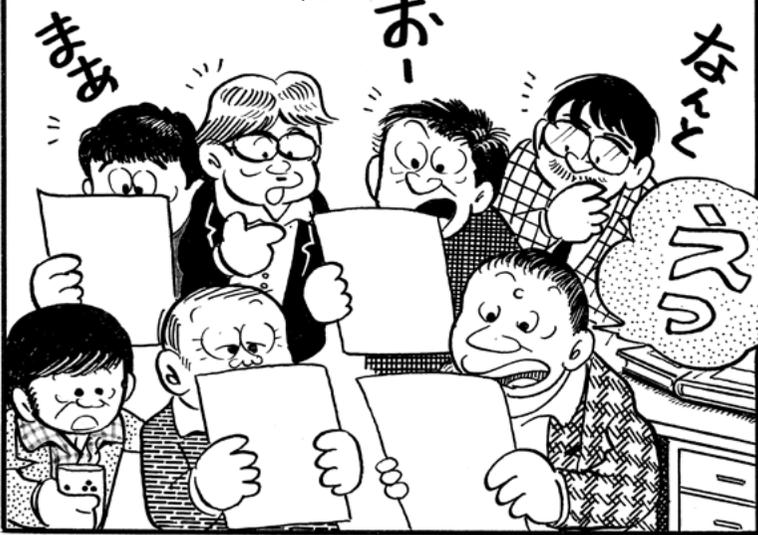


ご苦労さん
その原稿を
秋田書店へ
持って行って
くれないか

ふあーい

ここで簡単に
自動筆記に
ついて説明します
死者の霊が特定の
人物に下りてきて
文字を書いたり
する現象のことです
石ノ森先生も
あの世から
この世に戻ってまでも
伝えたい事が
あったのでしょ

翌日秋田書店へ行き
一晩で描いた原稿を
渡した
すると
多数の編集者達が
集まってきた皆驚いた
それもそのはず
絵やコマ割りなどの
表現方式が
生前の石ノ森章太郎氏に
ソックリだったからだ
皆ボクに訳を
聞いてきたので
昨日覚えていた限りの
事を話した





さっそく
緊急編集会議が
開かれ
翌月そのマンガは
霊界の石ノ森章太郎執筆
「霊界便り」として
店頭に並ぶ予定となった
もちろん遺族の承諾も得て



出版社として
大々的に
宣伝する
予定で
あったが…

原因不明の
火事により
印刷工場が
全焼し全て
消滅した
幸いにも
死傷者は出な
かった

出版
されないん
ですか



火災のあった
その晩に
また先生は
現れた



これには
出版社も
シヨックを
受けた

儲けを
損した〜

ガツッ



せつかく
自動筆記で
描いた
マンガが
火事で
燃えちゃい
ましたよ



先生

また
来たよ
アハハ



やあ



それは
どうゆう
意味ですか



あの火事ね
実は起こしたのは
私なんだよ

えっ



自分の
胸だけに
納めて
おこうとね

やはり
話の
内容は



私が
描いた
話が

この世に
知られては
いけないと
思ってたね



消え
ちゃったぞ

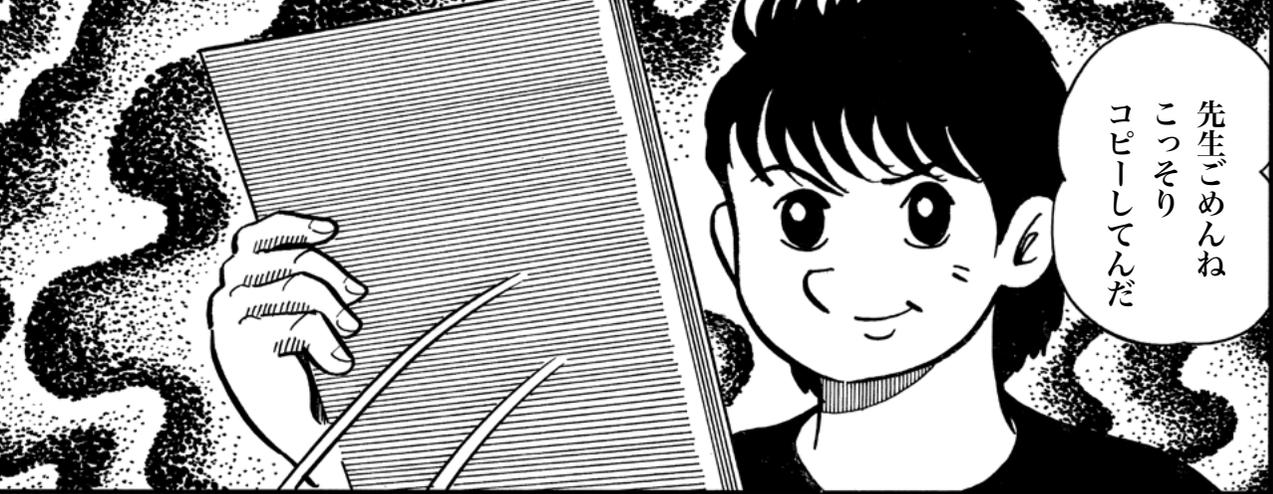
ニハ



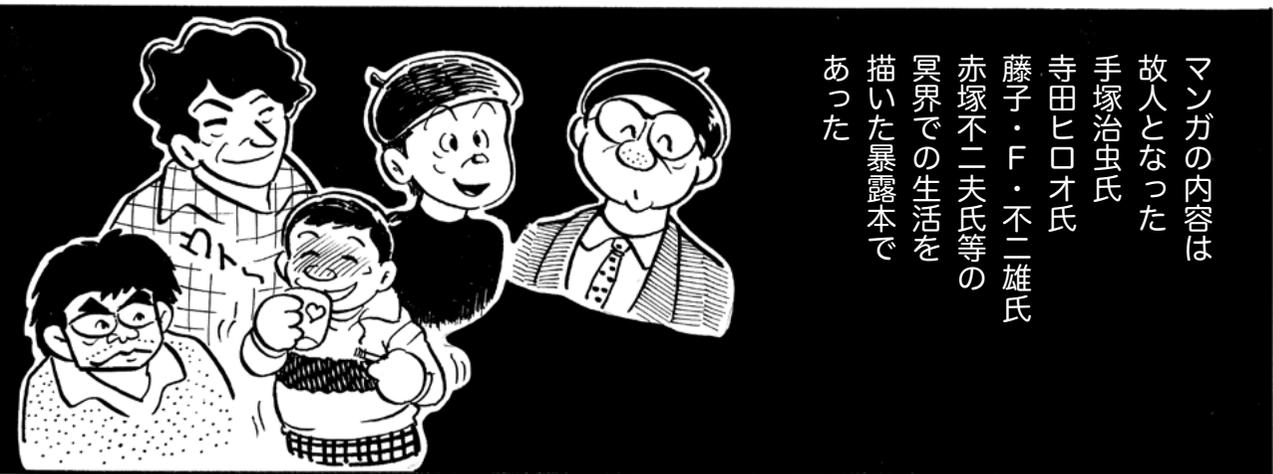
心の整理が
ついたから
二度と現世に
現われないヨ

じゃあな
ありがとう

ハハ



先生ごめんね
こっそり
コピーしてんだ



マンガの内容は
故人となった
手塚治虫氏
寺田ヒロオ氏
藤子・F・不二雄氏
赤塚不二夫氏等の
冥界での生活を
描いた暴露本で
あった



それと驚いたことは
冥界にも「トキワ荘」が存在し
亡くなった手塚先生達が
住んでいるらしい

冥界のトキワ荘の各部屋には
亡くなってから四十九日が
入居日となっていた
例えば石ノ森先生の場合は
平成十年六月六日と……
まだ部屋が
何室かあった……



ん・この部屋は
藤子不二雄A先生の
部屋だぞ

と……
言うことは
先生の
寿命は
あと××年
ウソだろ!!

原稿が
消えて
いく!!



コピーなど
しちやあ
いけないぞ
キミの記憶を
全て消して
おこう

ボクの名前は
山田三郎
将来マンガ家を
めざしている
ボクは毎月二十八日
大好きな石ノ森章太郎
先生が眠るお墓に
墓参りに行っている



ここだけの話だけど 自動筆記の巻 おわり

※この物語はフィクションで、特定の個人・団体とは関係ありません。